

## ドイツ民俗学における口承文芸研究について

金城ハウプトマン 朱美

### 0. はじめに

口承文芸研究とはどういう研究なのか？一言で言ってしまえば、メルヒェン (Märchen)、伝説 (Sage) と笑話 (Schwank) といった口伝えの民話の研究である。民間伝承の種類 (Gattung) 分けはヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリム (Jacob Grimm und Wilhelm Grimm) が19世紀に『ドイツ伝説集』 (*Deutsche Sagen*) で、「メルヒェンはより詩的であり、伝説はより歴史的である」 („Das Märchen ist poetischer, die Sage historischer“)<sup>1</sup>と述べたことが始まりだと言われている<sup>2</sup>。その後20世紀に入ってアンドレ・ヨレス (André Jolles) の『民間伝承の原型』 (*Einfache Formen*) で民間伝承を9つのジャンル「聖者伝 (Legende)、伝説 (Sage)、神話 (Mythe)、謎解き (Rätsel)、格言 (Spruch)、出来事 (Kasus)、回想録 (Memorable)、メルヒェン (Märchen)、ヴィッツ (Witz)<sup>3</sup>」に分類し<sup>4</sup>、今日まで様々な分類が試みられてきたが<sup>5</sup>、本稿ではこの問題には触れない。口承文芸研究は、大きく分けると文芸学的研究と民俗学的研究の二つに分けられるが、ここではドイツ民俗学にお

---

1 Brüder Grimm: *Deutsche Sagen*. 3 Bde. Hrsg. von Hans-Jörg Uther und Barbara Kindermann-Bieri. München: Diederichs 1993, S. 15.

2 Voigt, Vilmos: Art. „Theorien der Erzählforschung“. In: *Enzyklopädie des Märchens*. Bd.13. 2. Lieferung (2009), Sp. 486-494, hier Sp.489. この辞典を以下 EM と略す。

3 この言葉に対応する日本語訳が存在しないため、言語を日本語表記にした。

4 Vgl. Jolles, André: *Einfache Formen. Legende, Sage, Mythe, Rätsel, Spruch, Kasus, Memorable, Märchen, Witz*. 7. unveränderte Auflage. Tübingen: Niemeyer. 1999 (erstmal 1930).

5 Vgl. Honko, Lauri: Art. „Gattungsprobleme“. In: EM. Bd. 5 (1987), Sp. 744-769.

いてどのような口承文芸研究が行なわれてきたのかに焦点を当て、今日までの研究の動向、さらに今後の課題について考察する<sup>6</sup>。

## 1. ドイツでの口承文芸研究の始まり

民衆 (Volk) が注目されるようになったのはバロック時代のジャンバッティスタ・ヴィーコ (Giambattista Vico)<sup>7</sup>以降であり、ブルジョア層が徐々に台頭してきたことにも関係する。それまでは民衆=農民であり、民衆文化=農民文化であった。農民こそ皆が忘れかけている、或いはもう忘れてしまった風俗習慣といったものを未だに踏襲していると考えられ、この図式は第二次世界大戦後まで有効であった。1525年の農民戦争時に、農民たちが生活状況と労働環境の改善を領主に訴えかけたことから分かるように、この頃から農民の生活が変化していき、農民文化の崩壊が徐々に見られてきた。彼らは農作業の合間にメルヒェンを語ったり、また長い冬の夜に人々が集いメルヒェンが語られたので、口承文芸が農民の間で生き続けていると考えられた。やがてロマン主義の時代になると、当時の政治的状況もあいまって、昔から語り継がれたとされる民間伝承のなかにゲルマン文化の名残を探そうと、メルヒェンや伝説が蒐集され研究されるようになった。1800年初頭のドイツはまだ統一国家を形成しておらず、数々の小国家の集まりであり、市民は統一ドイツ国家への憧れを抱いていた。フランス革命後それらの国々がナポレオンに支配されることにより愛国心が強まり、「古きよき時代」への憧れが強まった。こうして古代にゲルマン信仰や神話の原型があると考えられ、それを探求したのがグリム兄弟を初めとする神話学派 (Mythologische Schule) の学者たちであった<sup>8</sup>。

そして19世紀始めにクレメンス・ブレンターノ (Clemens Brentano) やアヒム・フォン・アルニム (Achim von Arnim) が古いドイツ民謡を

---

6 本稿執筆に使用した主要参考文献は文末参照。

7 Weber-Kellermann, Ingeborg: *Einführung in die Volkskunde/Europäische Ethnologie*. 3. Auflage. Stuttgart: Metzler 2003, S. 5.

8 Vgl. Brednich 2001, S.61

蒐集し『少年の魔法の角笛』（Des Knaben Wunderhorn）を1805/1808年に出版し、1806年からグリム兄弟もこの蒐集に参加していたことはよく知られている<sup>9</sup>。兄弟はより多くの民話民謡が彼らの元に集まってくるようにと、回状<sup>10</sup>で彼らの友人知人などに呼びかけるが、彼らの思うように反響は得られなかった<sup>11</sup>。『少年の魔法の角笛』の次回作、メルヒェン集に使われるべくプレントナーノに送られた原稿は、等閑に付されたままであったが、その後、予備にとっておいた手書きの原稿をもとにグリム兄弟自身の手で『子どもと家庭のメルヒェン集』（*Kinder-und Hausmärchen*, 略して *KHM*）が出版された<sup>12</sup>。

ここでメルヒェンの語り手について注目してみたい。*KHM*の語り手には、グリム兄弟と親交が深かったマネル家（Familie Mannel）、ヴィルト家（Familie Wild）、ハッセンプフルーク家（Familie Hassenpflug）の娘たちやドロテア・フィーマン（Dorothea Viehmann）といった女性が目立った<sup>13</sup>。中でもフィーマンの信頼が非常に厚かった。それは、彼女は一つの話を何度でも同じ言葉で語ることができたし、彼女が「農婦」であり「生粋のヘッセン人」であり、「50歳を超えたぐらい」の語り手であり、これがまさにグリム兄弟のもつ語り手像に当てはまったからで

9 Vgl. Rölleke, Heinz: *Die Märchen der Brüder Grimm. Eine Einführung. Aktualisierter und korrigierter Neudruck. 3. durchges. Aufl.* Bonn/Berlin: Bouvier 1992. Stuttgart: Reclam 2004 (Universal-Bibliothek; Nr. 17650), S. 32

10 Denecke, Ludwig (Hg.): *Jacob Grimm. Circular. Wegen Aufsammlung der Volkspoesie. Wien 1815. Facsimile. Mit einem Nachwort von Kurt Ranke.* Kassel 1968.

11 Vgl. Gerstner, Hermann: *Brüder Grimm. Reinbek: Rowohlt 1973; 9. Auflage 1997, S.4.* und Rölleke, Heinz: Art. „Kinder – und Hausmärchen“ In: EM. Bd. 7 (1993), S.1278–1298, Sp. 1280. しかしこれで集まった伝説を元に『ドイツ伝説集』（*Deutsche Sagen*）が1816年と1818年に出版された。

12 この原稿が後に発見され、Röllekeが編集出版している。エーレンベルクの手書き原稿（Ölenberger Handschrift）とか初稿（Urfassung）と呼ばれている。Vgl. Rölleke, Heinz (Hg.): *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der handschriftlichen Urfassung von 1810 und der Erstdruck von 1812.* Cologny-Genève: Martin Bodmer 1975.

13 Vgl. Rölleke 2004, S.76–82.

ある<sup>14</sup>。それにエーミル・グリム (Emil Grimm) の描いたフィーマンの肖像画が第二版 (1819年版) から掲載され、読者にもこれぞ「本物の語り手」という印象を視覚的にも与えるようになった。

現在、「メルヒェンと言えばグリム童話」と思わせるぐらいグリム童話が一般に浸透しているが、グリム童話は特殊なメルヒェンである。語り手から聞いた話をグリム好みに、すなわち形容詞を増やしたり、諺や慣用句を加筆し、文芸的に完成度が高くなるよう書き変えられ、またいかにも地方の民衆が語ったようなメルヒェンに仕立てられ、オリジナルとは異なるものとなっているからだ。エーレンベルク稿が発見されてからグリム童話の初稿から初版、最終版 (1857年版) に至るまで、どのように文章が書き変えられていったのか比較検討することが可能になった<sup>15</sup>。またグリム兄弟の伝説集でも同じようなことが行われていたことが分かっており、「口伝えされた本物」(mündlich-authentisch) の文体に整えられている。

さて *KHM* の出版後、当時のドイツや近隣諸国でも失われかけている民間伝承を残そうと民話蒐集が始まるが、民話の蒐集を文献に頼るだけではなく、次第にフィールドワークに重点が置かれていく。間接的に聞いた話、或いは特別に設定された状況で話されたのがメルヒェンではなく、農民に限らずその土地の人たちが、「自然に」語った話に信頼が置かれるようになった。そして徐々に語り手の素性や、話が語られる背景などが重要視されるようになってくる。例えばウルリッヒ・ヤーン (Ulrich Jahn) は、話を蒐集したい土地にみずから定住して、その土地の人々に馴染んでからそこで自然に語られる話を聞き集めた<sup>16</sup>。テングッテン出

14 Vgl. ebd., S.89-90. しかし彼女は生粋のヘッセン人でなかったことが明らかになっている。野口芳子著『グリムのメルヒェン その夢と現実』、東京、1994年、22-23ページ参照。

15 今から20年以上前、1985から1986年にグリム兄弟生誕200年記念行事が行なわれ、その頃グリム兄弟著作物の研究が盛んに行なわれた。この研究のことをグリム文献学 (Grimm-Philologie) と呼んでいる。ハインツ・レレケ (Heinz Rölleke) やローター・ブルーム (Rother Blum) といったドイツ文学研究者が取り組んでおり、文献比較を主とするので民俗学的研究では距離をおかれている。

16 Vgl. Brednich 2001, S. 64. Jahn, Ulrich: *Volkstümliches in Glaube und Brauch*, Sage

身のヘアタ・グルッデ (Hertha Grudde) は、夫の赴任先であるバイスライデンでその地方に伝わる民話・民謡を蒐集し、『低地ドイツ語の東プロイセンメルヒェン集』 (*Plattdeutsche Volksmärchen aus Ostpreußen*) を編集した。彼女の場合、女性でありまた「よそ者」であったので地元の人々の信頼を得られるまで大変苦勞し、このメルヒェン集も彼女の苦勞の賜物とも呼べるものである<sup>17</sup>。

こうして数々のメルヒェン集や伝説集が出版され、民話の研究法も発展していった。以下、各々の口承文芸研究法について簡単に説明する。

## 2. 口承文芸研究法について

口承文芸研究法は、口承文芸テキスト分析法とその理論に分けられるが、その違いは曖昧である。口承文芸テキスト分析法の場合、分析法が一つだけではなく、グリム兄弟の時代から今日まで変遷していき、またそれらの分析法が単独で使用されてきたのではなく平行して使われてきたこと、そして全てのジャンルに使えるオールマイティーな分析法が確立していないことをまず最初に述べておく。口承文芸テキスト分析法として、神話学的方法 (Mythologische Methode)、地理歴史学的方法 (Geographisch-historische Methode)、構造主義的方法 (Strukturalistische Methode)、話し手とコンテクスト研究 (Erzähler-und Kontextforschung)、実験的口承文芸研究 (Experimentelle Erzählforschung)、パフォーマンススタディー (Performanzstudien) と意識研究 (Bewusstseinforschung) が挙げられる<sup>18</sup>。

---

*und Märchen*. In: Alfred Kirchhoff (Hg.): *Anleitung zur deutschen Landes- und Volksforschung*. Stuttgart 1889, S. 433-480.

17 Vgl. Kaneshiro-Hauptmann, Akemi: „*Leser als Forscher*“: *Über die aktiven und hilfsbereiten Leser der modernen Sagensammlung von Rolf Wilhelm Brednich*. 関西大学『*独逸文学*』50号 (2006年), S. 151-178., hier S.156-159.

18 Brednich 2001, S. 64-74.

## 2.1. 神話学的方法ならびに地理歴史学的方法<sup>19</sup>

まず神話学的方法だが、これは先程述べた神話学派によって行なわれた研究方法で、古代にゲルマン神話や信仰の原型があると考えられ、それらを再構築しているものが民間伝承であり、そのためメルヒェンの起源や分布が調べられた。またメルヒェンはインドゲルマン神話・信仰から発達したものだと考えられ<sup>20</sup>、1837年にヤーコブ・グリムは『ドイツ神話学』(*Deutsche Mythologie*)を出版した。こうしてテオドア・ベンファイ(Theodor Benfey)は、全ての民間伝承の起源は古代ゲルマンではなく、インドにあると提唱するインド起源説を唱えた。一方アンドリュウ・ラング(Andrew Lang)は、メルヒェンは全人類共通のものであり、人類の持つ原始的な極めて古い思考(primitive Urgedanke)であると定義した。これら単一の次元、つまり特定の地域やあるいは全人類共通の志向に限定して民間伝承が発生したとする単一発生説をもとに、ユリウス・クローン(Julius Krohn)とカーレ・クローン(Kaarle Krohn)は地理歴史学的方法を唱えた。そしてその弟子アンティ・アールネ(Antti Aarne)といったフィンランドの学者たちがこの研究法を支持したため、フィンランド学派と呼ばれるようになった。この地理歴史学的方法とは、口承伝承も書物によって伝承されてきた話も分け隔てなく扱い、各話をタイプ化、分類、そして個々の話の古さや発祥地、伝播状況などを比較していきメルヒェンの原型となるもの(Urform)を探す研究法である。民話の様々な類話を扱い地理的な分布、その話が語られるようになった時期の調査が可能なこと、口承伝承されてきたのかどうか分かること、また神話学派がただ単に推測している民話の起源をはっきりとした資料に基づいて明確にできることが、この研究法の長所として挙げられ<sup>21</sup>、民話の比較研究が可能になった。しかしアルフレッド・ヴェセルスキー(Alfred Wesselski)はこの研究法を口承文芸の分布に当てはめるのでは

19 Pöge-Alder, Kathrin: Art. „Mythologische Schule“. In: *EM*. Bd. 9 (1999), Sp. 1086–1092.

20 Voigt, 2009, hier Sp. 488.

21 Vgl. Brednich 2002, S. 65–66 und Voigt 2009, Sp. 488.

なく、文学テキストの伝播にあてはめるべきだと反論し、カール・W・フォン・シドー (Carl W. von Sydow) は生態系をコンセプトの中心に掲げるようにと対立した。

1907年に『民間伝承仲間コミュニケーション』(*Folklore Fellows Communication*、略して *FFC*) が創刊され、アールネはこの雑誌で1910年に『専門家によるメルヒェンタイプリスト』(*Verzeichnis der Märchentypen mit Hilfe von Fachgenossen*)、1912年には『フィンランドのメルヒェン類話——1908年までの採集記録リスト』(*Finnische Märchenvarianten. Verzeichnis der bis 1908 gesammelten Aufzeichnungen*) を発表した。後者は、フィンランド文学協会が記録保存していた約26,000ものメルヒェンをカタログ化する際に、その分類法が確立していなかったため、それを独自に開発する必要があり、そのため現存するメルヒェンのモチーフを分類し、メルヒェンの内容整理を図るために作成されたカタログであった。フィンランドのメルヒェンのみならずグリム童話やデンマークの民間伝承も収録されており、後の1961年に発行されたアールネとトンプソンの『民間伝承のタイプ——分類・文献目録』(*The Typ of the folktale. A classification and bibliography*)<sup>22</sup>の原型になった。またこのアールネ・トンプソンカタログを補充拡大をしたのがゲッティンゲンのハンス＝イェルク・ウーター (Hans-Jörg Uther) であり<sup>23</sup>、それ以後モチーフ番号が AaTh 番号ではなく、ウーターのイン

---

22 これを「アールネトンプソンカタログ」と呼ばれ、またこのカタログに掲載されているモチーフ番号を AaTh310などと表示されるようになった。

23 Uther, Hans-Jörg: *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography. Based on the System of Antti Aarne and Stith Thompson. Part I. Animal Tales, Tales of Magic, Religious Tales, and Realistic Tales, with an Introduction.* Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia 2004 (FFC; No.284), ders.: *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography. Part II. Tales of the Stupid Orge, Anecdotes and Jokes, and Formula Tales.* Helsinki: Based on the System of Antti Aarne and Stith Thompson. Suomalainen Tiedeakatemia 2004 (FFC; No.285) und ders.: *The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography. Based on the System of Antti Aarne and Stith Thompson. Part III. Appendices.* Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia 2004 (FFC; No.286).

デックスに掲載されている番号 ATU<sup>24</sup>が使用されるようになった。どちらのインデックスにせよヨーロッパのメルヒェン集をベースにしているのでヨーロッパ中心主義（Eurozentrismus）だと批判される節がある。

さて話を19世紀終わりのフィンランド学派の研究法に戻すと、民話の比較の際、同人種から派生したもの（Arteigenes）と他人種から派生したもの（Artfremde）に分けられたため、この分別法が後に第三帝国時代に利用されることになる。『ドイツメルヒェン中型辞典』（*Handwörterbuch des deutschen Märchens*）の編纂をルッツ・マッケンゼンら（Lutz Mackensen）が試みるが、未完成に終わった。また時を同じくしてアドルフ・バスティアン（Adolf Bastian）やエドワード・B・タイラー（Edward B. Tylor）により人類学的理論が唱えられた。これは人間が世界の異なる地域でも、異なる時代にも、人類史において同じ発達段階に達し得るという考え方であり、ここから多元発生主義（Polygenese）の理論が構築された。

現在、ドイツ民俗学において地理歴史学的方法は、文献学的要素が強いため、また原型や元型（Archetyp）と言った單元主義的なものを探索することに対する関心が薄れてきているため、あまり用いられなくなったが、大衆心理学や秘儀といった別の分野で利用され続けている。

モチーフ比較研究は、ケーススタディ（Fallstudie）やケースブック（Casebook）とも呼ばれ、アメリカなどで盛んであるが<sup>25</sup>、しかし、この方法で世界のメルヒェンを比較研究すること自体に賛否両論がある。例えばレアンダー・ペッツォルト（Leander Petzoldt）は、メルヒェンや伝説のそれぞれのモチーフがその話の古さを表しているのではなく、個々の民間伝承は、それぞれの歴史的、社会的、文化的コンテクストから推定され、解釈されなければならない<sup>26</sup>として、この研究法か

24 例えば ATU440は KHM1「カエルの王様」にあたる。AaTh440も同じく「カエルの王様」のモチーフであったが、中には ATU では AaTh と違う番号になっているものもあるので単純にそのまま AaTh 番号を ATU に置き換えられない。

25 Vgl. Röhrich 2001, S. 517.

26 Petzoldt, Leander: *Einführung in die Sagenforschung*. 3. Auflage. Konstanz: UVK 2002 (UTB für Wissenschaft; 2353), S. 195–196.

ら距離を置いている。

## 2.2. 構造主義的方法

第一次大戦後1928年には、ロシア学派の影響を受け、ウラジーミル・J・プロップ (Vladimir J. Propp) の『昔話の起源』 (*Morphologie des Märchens*) も入ってきた。この中でプロップはアレクサンドル・アフナーシェフ (Alexander Afanasjew) のロシア魔法昔話集に収録されているメルヒェンを分析し、その結果、全ての魔法昔話は同じ構造を示していることが分かった。すなわち、まず初めに何か欠けていたり (「欠如」)、何か危害を受けたりし、話のまん中で「機能」 (Funktion) と呼ばれる昔話を構成している31の機能を通じて困難を克服し、最後に結婚したり富を得たりして「解決」して話は終わるという枠組みであり、「機能」は例外的に同じ順番で起こらないこともあると明示している。彼はこれをアールネのインデックスに代用したかったようだが、これはメルヒェンをタイプ分けしたのではなく、メルヒェンで起こる出来事を細分化して構造分析したものであったので、広く受容されなかった。ドイツで根付かなかったこの研究法はアメリカのアラン・ダンデス (Alan Dundes) が引き継ぎ北アメリカインディアンの昔話をこの方法で分析し、「機能」の使われ方を再探求してインディアン昔話に当てはまるものを見つけた<sup>27</sup>ように、現在もアメリカやロシア、フランスでこの研究法が受け入れられている。

マックス・リュティ (Max Lüthi) もメルヒェンの構造に注目したが、話の構造ではなく、その形式を抽象化して分析し、存在論的形式観察を行なっている<sup>28</sup>。彼の著書『ヨーロッパの昔話』 (*Das europäische Volksmärchen*)<sup>29</sup>によるとメルヒェンの特徴として「一元性」

---

27 Vgl. Brednich 2001, S.66-67.

28 Voigt 2009, Sp. 489

29 Lüthi, Max: *Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen. Neunte Auflage.* Tübingen: Fracke 1992. 日本語訳・小澤俊夫『ヨーロッパの昔話』東京 岩崎美術社 (1995年)。

（Eindimensionalität）、「平面性」（Flächenhaftigkeit）、「抽象的様式」（Abstrakter Stil）、「孤立性」（Isolation）などが挙げられ、メルヒェンの登場人物が本物の人間のように三次元で記述されていないことに言及し、それにより現実との距離が置けるとされている。

### 2.3. 話し手とコンテクスト研究

この研究の根底にはクルト・ランケ（Kurt Ranke）の言葉 „homonarans“<sup>30</sup>、「あらゆる種類のハナシを語るということは人という生物の生まれ持つ欲求の一つに起因する」がある。その背景には、20世紀に入り、文献学的口承文芸研究からコンテクストを踏まえた文化人類学的アプローチへと変遷していったことが挙げられる。第一次世界大戦後に、ロマン主義時代からの考え方、「真の民衆の遺産なる物」（Volksgut）は匿名であり共同に保有しているものであるという考え方が廃れてきて、徐々に、語り手のパーソナリティーに注目され始めた。そのため興味の対象がハナシ自身ではなく語り手、語る機会、語り方や、ハナシとその社会システムとの相互作用へと移っていった。すなわち、コンテクスト研究では、社会における口伝の伝統を取り巻く全生活環境を考慮し、伝承ルートを明確にするのではなく、そのハナシの持つ意味や意義、機能が問われる。ここで言うコンテクストとは、「伝達の意義について具体的な状況で決まるものであり、民間伝承の解釈として理解される」とロルフ・W・ブレートニヒ（Rolf W. Brednich）が述べている<sup>31</sup>。

1950年代にエムス地方の臨時労働者であったエグベート・ゲリツ（Egbert Gerrits）の語った話をゴットフリート・ヘンセン（Gottfried Henßen）が研究し、またジークフリート・ノイマン（Siegfried Neumann）はこの方法を元にボンメルンの昔話を蒐集した。こうして語り手の生い立ち、話のレパートリーの分析などにより庶民の口承文芸伝承における芸術的ファンタジー、想像力や記憶力の研究に貢献した。コ

---

30 Uther, Hans-Jörg.: Art. „Kurt Ranke“. In: *EM*. Bd. 11 (2004), Sp. 207-213, hier Sp. 211.

31 Brednich 2001, S. 67-68

ンテキストとは言ってもどちらかという語り手の人物像に重点を置いているので、ドイツでは別名「語り財の生物学」(Biologie des Erzählguts)と呼ばれている。ここで、男女どちらの語り手の方が「よい」語り手なのか、という疑問が湧くであろう。男女問わず、語り手個々人の昔話に対するかかわり方が異なるため、どちらがよい語り手か性別では判断できない。「女性の語り手」が理想の語り手だというイメージを作り上げたのは、グリム兄弟の語り手たちであり、中でも特に彼らによって理想の語り手と称されたドロテア・フィーマンに起因すると言っても過言ではないであろう。

#### 2.4. 実験的口承文芸研究ならびにパフォーマンススタディー

実験的口承文芸研究とは「伝達ゲーム」のように、あるハナシを意図的に実験的に次から次に伝えていくと、どのような伝達過程を経るのかを研究する方法であり、1920年に認知心理学者フレデリック・チャールズ・バートレット (Frederick Charles Barlett) が最初に行なった。この研究で彼は伝達過程で生ずる変化は、記憶の再生産にかかわることを明らかにし、変化した箇所をシステム化して整理することによって、話に肯定的・否定的な作用があることをつきとめた。ヴァルター・アンダーソン (Walter Anderson) は学生達に一回だけとある悪魔の話を語り、それを一定期間を置いてから、文字で再話させるという実験を行なった。語られた話と記述された話のずれが生じた部分は大体が同じであったが、この実験の証明性は低いとされている。そしてリンダ・デグ (Linda Dégh) とアンドリュウ・ヴァゾニー (Andrew Vászony) がコンデュー理論を打ち立てた。これは話が話者のフィルターにかけられ内容が取捨選択されて再話され、中には全く再話されない話も出てくることを指し、そのフィルターや再話するか否かの選択は、社会 (Conduits) に起因するとされる。これは現代のメディア研究にも通用する理論で、情報を受信した者がそれをさらに伝達・発信するかその過程を示せる。

パフォーマンス研究だが、「パフォーマンス」と聞くと、手品や何か芸をすることを思い浮かべるだろう。口承文芸をパフォーマンスするということは、催事場やお祭り、学会などで見世物として伝統的な民間伝

承が語り手の想像力にまかせ、語られ、演出され、新しく作り変えられることを指し、その話に対する観客の反応を調査することが、この研究対象になる。アメリカ民俗学では民間伝承というものは小さなグループ内の人工的なコミュニケーション手段と理解されているので、「よい語り手」は、聞き手に芸術的コミュニケーションに富んだアクションをしながら特定の方向性を示し、伝えたいメッセージをあらかじめよりよく整理して、理解させることができる者とされる。ヨーロッパにもプロの語り手があり、パフォーマンスが行われているが、この研究方法は実際にあまり実践されていない。その理由として、筆者が推測するには、パフォーマンスで見せられる話よりも、話の持つ信憑性の方が重要視されているからではないかと思われる。

## 2.5. 意識研究

一言で言うと、日常生活で語られる個人的なハナシの背景にあるものを考察する研究であり、ドイツでは1950年代に早くもヘルマン・バウジンガー (Hermann Bausinger) が着目し<sup>32</sup>、仕事の思い出話や戦争体験談などを分析した。そしてこの研究は「意識研究」という名で、1980年代以降、今日の口承文芸研究において主流になりつつある研究法であり、ドイツではアルブレヒト・レーマン (Albrecht Lehmann) が注目した研究法<sup>33</sup>である。ここで言う意識 (Bewußtsein) は、何を意味するかと言うと、レーマンによると、個々人が経験してきたことに基づいたこと、価値基準、見解、人生の希望といったことを差す<sup>34</sup>。「民俗学の重要な課題として生活状況を理解すること、人々の過去や現在に対する意識を理

---

32 Vgl. Bausinger, Hermann: *Lebendiges Erzählen. Studien über das Leben volkstümlichen Erzählgutes auf Grund von Untersuchungen im nordöstlichen Württemberg*. Diss. Tübingen 1952 und ders.: Art. „Alltägliches Erzählen“. In: *EM*. Bd. 1 (1977), Sp. 323-330.

33 Vgl. Lehmann, Albrecht: *Reden über Erfahrung. Kulturwissenschaftliche Bewusstseinsanalyse des Erzählens*. Berlin: Reimer 2007 und ders.: *Bewußtseinsanalyse*. In: Göttisch/Lehmann 2001, S. 233-249.

34 Vgl. Lehmann 2007, S.9-14.

解することが挙げられ、現在語られている話のその諸機能に対する研究は、早急に行なわれねばならない。現存する話の素材やその状況コンテクストの分析が、口承文芸研究ではまだ十分に行なわれていない。文化学ならびに社会学の領域で、現代に生きる人々の挑戦していること、チャンスや拒んでいることを探求し、各々の一部の文化的、歴史的、伝記的状况の中で社会的且つ文化的アイデンティティーを見つけることを目的とする。」と、レーマンはこの研究の重要性を説いている<sup>35</sup>。話し手は自分の体験談を聞き手も分かってくれることを前提にして話す。しかし、万人が同じ経験をしてきておらず、ましてや自分のことを理解してくれるだろうと思う聞き手も、語り手と全く同じ経験をしてきたとは言えない。せいぜい似たような経験をしたことはありうるが、各人の育ってきた環境や家族構成なども考慮すると、必ずしも全く同じ境遇で育ってきたことはないに等しい。そのため同じ戦争体験談であっても、話し手と聞き手の間にずれが生じるのは必然的である。このずれが生じる部分が「意識」の違いであり、この差のもとになる意識を研究するのが意識研究である。こうして民俗学でも現代人の歴史的史実に基づいた戦争経験や戦時中の拘留生活、戦中戦後の移民体験についてインタビューされ、その話が分析されるようになった。単に時代背景のみを重視せず、個々人の自叙伝を考慮して話を分析することがここで重要になる。メルヒェンや伝説と言った、世代を超えて口伝えされてきた古い話の研究ではなく、第三者に語られる前の直接当事者から語られる話の研究である。

## 2.6. 「口伝えの話」(Mündlichkeit) と「文字化された話」(Schriftlichkeit)

ここで、口承文芸研究のもとになる資料について考えてみたい。民俗学では長い間口承されている話は「第一級の資料」であり、また「本物の資料」であると評価されてきた。しかし純粋に何十年も何百年も「口伝え」のみで伝えられてきた話があるだろうか。それは想像しがたい。なぜなら口伝えの民話といえども、いつしか文字になって記録され、そ

---

35 Ders.: *Erlebnisse im Alltag. Tatbestände, Situationen, Funktionen*. In: *Zeitschrift für Volkskunde* 74 (1978), S. 198-215, hier 215.

れがまた語られ記録され、さらに語り継がれるということが繰り返されているからだ。記録された話はその記録が紛失しない限り数世紀にもわたり存在することが可能であるが、純粋な口伝えの話（人の噂話など）の寿命は短く、何百年も全く同じ話が語り継がれるとは考えられない。また、人々が語る話にはその時代の人々が興味を持つ内容が含まれており、時代背景や人々の関心が異なる中世から近代、あるいは現代まで全く同じものに世間の人々が興味を持ってきたとは考えにくいからだ。もっとも、この「再口承」(Re-oralisierung)<sup>36</sup>されてきた話が、どんなプロセスを経て記録されるようになったのかはほとんど知られていない。中世の民衆文化は文字文化ではなく「語りの文化」であって、その一部が書き残されているに過ぎない。その書き残された民衆の話は当時どのような意味を持っていたのかを考察するのが、今日の研究課題になる。またどのメディアが文字文化と口承文化の仲介役を果たしていたのか、メディアが当時どのような位置を占めていたのを調査したり、文字化し後世に残されるものと、口承のままですぐ消えて失くなるものがどのような基準で選択されてきたのかなどが研究されている<sup>37</sup>。ルドルフ・シェンダ (Rudolf Schenda) によると19世紀に蒐集されたドイツ語圏のメルヒェンと伝説の数は500程しかないのに、本に収められた話は20,000を超えている。それに加えて民衆叙事詩や説教メルヒェン、模範本 (Exempel) に民衆本や短編小説の素材が、伝説やメルヒェン、笑話などとして口承化されて後世まで生き延び、そしてこれが「本物」の民族テキストとして記されるのだとルッツ・レーリッヒ (Lutz Röhrich) は述べている。教科書やカレンダーに掲載されている話が、また口伝えされ、そして新聞に掲載されている衝撃的な事件などが語られ「再口承」されていき、話が再生産・再利用されており、これは今後も続いていくであろう。

36 「再話」と訳したいところだが、耳から伝えられた話をまた口で伝えるだけの場合に「再話する」(wiedererzählen) と言うので、Re-oralisierung は文字化された話を話して伝えるので「再口承する」と訳し、再話とは区別する。

37 Vgl. Röhrich 2001, S. 518-519.

### 3. 現代の語りとその研究の可能性

さて、メルヒェンや伝説といった伝統的な口承文芸のジャンルが、日常生活で人々に語られなくなってからもう久しいが、これらの民話が消滅したのではなく、受容の仕方が変わったのである。直接語り手から聴くのではなく、間接的にCDなどに録音されたものを聴いたり、また「読む」話に変容したのだ。映画や小説、テレビ番組やコマーシャルといった様々なメディアで、メルヒェンや伝説のモチーフは未だに利用され続けている。では現代人の口から口へ伝えられる話は全く無くなってしまったのであろうか。そうではなく語られているハナシが時代と共に変容しただけである。ハナシにおちがあるヴィッツや現代伝説 (*moderne Sagen*)、噂話といったジャンルのものは人々に語られ再話され、またインターネットや携帯電話など現代のコミュニケーションツールを媒体にし語られている<sup>38</sup>。人々の関心が非現実的なテーマからより現実味を帯びたものへと変化してきたことが、これらのハナシが語られる理由の一つに挙げられるであろう。またハナシの短さが、多忙な現代人のコミュニケーション手段としてふさわしく、現代伝説のような短くおかしな話や信じられない話が、その場をすぐに盛り上げたりできるため好まれる。こうして何らかのハナシをグループ内で共有することにより、仲間内での連帯感も強まると考えられる。かつては、同じ昔話を知る者たちの仲間意識が高まり、その一つのまとまり自体が一共同体をなしていたが、今日ではそのまとまり自体が小さくなり友人知人の内輪のハナシであったり、チャット仲間が共有する情報の一つになっている。一個人や団体など特定のものを対象にしたハナシは、それに関心のない人にとっては何も面白くなく聞き流されてしまう。逆にセンセーショナルな話題の場合（例えば、ある銀行が倒産寸前なので預金を引き出しておかないと全額戻らないという噂）は、一気に短時間のうちに口コミで広がり、人々がパニックに陥ることもありうる。ヴィッツは、特定人物をターゲ

38 Vgl. Kaneshiro-Hauptmann, Akemi: *Betrachtung der modernen Sagenforschung – Begriff, Geschichte, Rezeption und Problematik* –. 関西大学『独逸文学』45号 (2001年), S. 151–178.

ットにすることも多いが、もっと大きな領域で、例えば性別や出身地、職業などが笑いの対象になり、人々の笑いを誘い、どちらかというと偏見に満ちたような話も少なくない<sup>39</sup>。現代伝説もヴィッツと似たところがあるが、ハナシの長さがヴィッツよりも長く、嘘みtainな本当の話であり真実のかけらが含まれおり、人々の持つ不安や恐れ、望みや希望、偏見や復讐をモチーフにした話である。話し手が聞き手の信頼できる人物であり、その人物の「友達のお母さんの知り合い」から聞いた話、いわゆるフォアフテール (Foaf) <sup>40</sup>であることを特徴としている。現代伝説が果たして、口承文芸研究において新しいジャンルと見なされるのかどうか、歴史的伝説と比較されている<sup>41</sup>。またインターネットのチャットルームで語られる現代伝説や、チェーンメールや通常のメールで送られてくる現代伝説についての研究もドイツ語圏では1990年以降からロルフ・W・プレートニヒやインゴ・シュナイダー (Ingo Schneider) <sup>42</sup>らによって行なわれている。ネット上に広がるハナシや、昔からある民間伝承がメディアと現代社会とどう関わっていくのか、また現代伝説に内在する信憑性が各方面でどう扱われ、また今後どのように扱われていくのかが、さらに深く追求されていくのではないかと思われる。

39 しかし、ドイツ人と日本人の笑いのツボが異なるので、ブラックジョークのようなハナシもヴィッツに含まれる。

40 „A friend of a friend“ の省略が Foaf である。Brunvand, Jan Harold: *American Folklore*. New York. 1996, S. 730.

41 Vgl. Ingo Schneider: *Giftmord oder Unglücksfall: Zur Motivgeschichte von Erzählungen über vergiftete Kleider*. In: Ders. (Hg.): *Europäische Ethnologie und Folklore im internationalen Kontext: Festschrift für Leander Petzoldt zum 65. Geburtstag*. Frankfurt: Lang 1999, S. 273–290. Ders.: *Traditionelle Erzählstoffe und Erzählmotive in Contemporary Legends*. In: Schmitt, Christoph (Hg.): *Homo narrans. Studium zur populären Erzählkultur. Festschrift für Siegfried Neumann zum 65. Geburtstag*. Münster: Waxmann 1999, S. 165–179.

42 Brednich, Rolf W.: *Eine unendliche Geschichte*. In: Göttsch, Silke (Hg.): *Völkenskundliche Streifzüge. Festschrift für Kai Detlev Sievers zum 60. Geburtstag*. Kiel: Mühlau 1994a, S. 11–24. Schneider, Ingo: *Erzählung im Internet*. In: *Fabula* 37 (1996), S. 8–27

#### 4. 旧東独での口承文芸研究

ここで旧東独での口承文芸研究について少し触れておきたい。第二次世界大戦後、東西ドイツに分裂してからも、両国で口承文芸研究は継続されていった。旧東独で口承文芸研究を行っていた研究者の一人に、ジークフリート・ノイマンが挙げられる<sup>43</sup>。彼は1957年からウォシドーアーカイブ<sup>44</sup>とベルリンドイツ学術アカデミーの研究員を務め、1988年にはこの学術院の院長を務めた。1991年からロストックのメクレンブルク＝フォアポンメルン洲民俗学研究所所長を務め現在定年退官しているが、ロストック大学で講義を行ない研究活動を続けている。特にメクレンブルク＝フォアポンメルン洲の民話を中心に論文執筆やメルヒェン蒐集に力を注ぎ、論文数は100近く、また書評の数は200以上にのぼる。旧東独時代には、ポーランドやかつてのソビエト連邦といった共産圏だけではなく、フランスやアメリカでも研究成果を発表していた。

ノイマンが編纂したメルヒェン集や笑話といった民話集<sup>45</sup>の特徴に、低地ドイツ語表記が挙げられ<sup>46</sup>、「本物の語り手」が出所である話にこだわりを持っていたことがここに表れている。それにはリヒャルド・ウォシドー（Richard Wossidlo）が集めた民話も含まれるが、ノイマン自らが発見した語り手アウグスト・ルスト（August Rust）やベルタ・ペーター

---

43 Schmitt, Christoph: Art. „Siegfried Armin Neumann“. In: *EM*. Bd. 9 (1999), Sp. 1422-1425.

44 Wossidlo Archiv はロストックにあり、表音記録術を使い多くの話や民衆の言葉を蒐集し、今日も尚500万にもものぼる彼の残したメモが保管されており、このメモのデジタル化が進められている。現在の館長は西ドイツ出身のクリストフ・シュミット（Christoph Schmitt）である。

45 彼の編纂したメルヒェン集が当時よく売れたようで、発売日には本屋の開店時間前から人々が並び、メルヒェン本を買い求めたようだ。これは読書が市民の娯楽の一つだったことが窺えるエピソードでもある。筆者とノイマンとのインタビューより（1998年11月）。

46 Vgl. Neumann, Siegfried: *Der mecklenburgische Volksschwank. Sein sozialer Gehalt und seine soziale Funktion*. Berlin: Akademie-Verlag 1964, ders. (Hg): *Sagen aus Pommern*. Reinbek 1994 und ders.: *Volksschwänke aus Mecklenburg. Aus der Sammlung Richard Wossidlos*. Berlin: Akademie-Verlag 1963.

ス (Bertha Peters) の語りを彼らの生い立ちも含めて解釈し出版している<sup>47</sup>。語り手の話はテープレコーダーで録音され、一言一句、忠実に書き起こされた。彼は、グリム童話はグリム兄弟によって書き変えられたものなので、本当に民衆の口から語られたものではないと批判している。今日グリム童話の影響を全く受けていない民話を探すのは困難ではあるが、ノイマンはオリジナルの話をも探し続けている。低地ドイツ語について彼は「文化遺産である」と述べ、「もし低地ドイツ語を標準ドイツ語に翻訳したのであれば、低地ドイツ語がもつ本来の意味が失われてしまう」とし、方言で昔話が物語られる重要性を説いている。しかし近年低地ドイツ語が理解できない人々が増加しているゆえ、『ポンメルン洲の伝説集』(Sagen aus Pommern)<sup>48</sup>は標準ドイツ語に訳さざるをえなかった。そのため低地ドイツ語をノイマンは「忘れられた精神文化遺産」と呼んでいる<sup>49</sup>。一方、彼に師事していたカトリン・ペーゲ＝アルダー (Kathrin Pöge-Alder) は、彼女の著書の中で、グローバル化の影響により近年標準ドイツ語よりもその土地の方言で語られる伝説が好まれる傾向がある、と興味深いことを述べている<sup>50</sup>。「読む」民話と「聴く」民話によって、ハナシの認識が異なることを暗示しているようである。

少数民族であるソルブ人が住むパウツェンに、1951年にソルブ研究所 (Das sorbische Institut/Serbiski institut) が設立され、壁崩壊まではベルリン学術アカデミーが運営していた。壁崩壊後はザクセン州とブランデンブルクが共同運営し、ソルブ民話研究家のズザンネ・ホーゼ (Susanne Hose) が研究員として従事している。

---

47 Ders.: *Mecklenburgischer Volkserzähler. Die Geschichten des August Rust*. Berlin: Akademie-Verlag 1968 und ders.: *Eine mecklenburgische Märchenfrau. Bertha Peters erzählt Märchen, Schwänke und Geschichten*. Berlin: Akademie-Verlag 1974.

48 Ders. (Hg.): *Sagen aus Pommern*. Reinbek: Rowohlt 1994.

49 Ebd. S. 8.

50 Pöge-Alder, Kathrin: *Märchenforschung. Theorien, Methoden, Interpretationen*. Tübingen: Narr 2007, S. 169.

## 5. 口承文芸研究機関、口承文芸研究雑誌並びに学会について

まず『メルヒェン百科事典』を編纂しているゲッティンゲン学術アカデミーが挙げられる。この事典が編集されることになった経緯を簡単に説明すると、第二次世界大戦中1930年から1940年まで、先に出た『ドイツメルヒェン中型事典』がナチ国家統制の下で編纂されていたが、この時完成しなかったプロジェクトが再開されたものである。戦後コンセプトを新たにし、クルト・ランケがこの事典を国際的なものにしようと再編集し始め、『メルヒェン百科事典・歴史的比較的口承文芸研究中型事典』(*Enzyklopädie des Märchens. Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung*)が編纂されることになる。初代総編集長はランケが、その後1982年からプレートニヒが総編集長を務める。EM全14巻(見出し語3600語)は2013年に完成予定で、現在13巻の2まで刊行されている<sup>51</sup>。項目執筆には世界60カ国から各分野の研究者約800人が参加しており、国際色豊かなプロジェクトではあるが、問題点を挙げるとすれば、編纂開始から数十年経過しているので項目によっては(例えばメディアについて)内容の補充が必要な箇所が出てきた点、また研究者以外に一般人の利用も視野に入れているが、知名度は残念ながら高くない点などである。EM編纂所には現在100万以上の民間伝承が所蔵されており、世界中の民話研究家が資料収集に訪れてくる。この他、ゲッティンゲンよりも前に1936年にドイツ民間伝承中央アーカイブ(*Zentralarchiv der deutschen Volkserzählung*)が設立され、約75,000の口伝えの話がマルブルク大学ヨーロッパ民俗学科の管理のもとに保管されている。

ランケはまたドイツの口承文芸研究雑誌『ファブラ』(*Fabula*)を1958年に創刊し、1959年には国際口承文芸学会(International Society for Folk Narrative Research)を発足させ、4、5年おきに世界大会が開催されている<sup>52</sup>。この学会は世界中の口承文芸研究家の発表の場となって

---

51 全ての見出し語がホームページに出ており、また一部の見出し語はPDFファイルで公開されている。URL <http://www.user.gwdg.de/~enzmaer/verweise-dt.html>

52 第15回大会が2009年6月にアテネで開かれ、次回は2013年にリトアニア共和国

いるため、公用語は、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語となっている。ドイツで発足した学会ではあるが、英語での発表が近年は90%以上を占め、英語のみが公用語化されていく傾向が強い。同様に『ファブラ』掲載論文にも英語論文が増加してきている。ドイツ民俗学研究者の国際化の必然性がこういったところで垣間見られる。

ドイツ民俗学協会（Deutsche Gesellschaft für Volkskunde）内には12の委員会があり、その中の一つに口承文芸研究委員会がある。2000年から2年毎に泊り込みでの研究発表会議（Klausurtagung）が行なわれ、委員長も2年毎に選出される<sup>53</sup>。その他、毎秋口承文芸研究家が発表できる国際会議を主催したり、ワークショップや講演会を行ないプロの語り手を養成している1956年設立のヨーロッパメルヒェン協会（Europäische Märchengesellschaft）<sup>54</sup>がある。1988年には国際現代伝説学会（International Society for Contemporary Legend Research）がイギリスのシェッフィールドで発足、現在2年毎に学会が開かれ、専門誌『同時代の伝説』（*Contemporary Legends*）を発行し、ニュースレターの『フォアフテール・ニュース』（*FOAFtale News*）はWeb上で閲覧可能である<sup>55</sup>。この様に研究発表の場はあるが、後世を担っていく口承文芸研究家を育成していくことが今後の課題の一つにもなっている。

---

の首都ヴェリニウスで行なわれる。また大会と大会の間に中間会議（Interim Conference）があり、次回開催地は2011年インドのシロン。

53 現在委員長はインスブルック大学のインゴ・シュナイダーが務め2010年9月にオーバーグーグルで第6回会議が開かれる予定である。通常、会議後個々の研究発表を掲載した論文集が出版される。Vgl. Wienker-Piepho, Sabine/Roth, Klaus (Hg.): *Erzählen zwischen den Kulturen*. Münster: Waxmann 2004 (Münchener Beiträge zur Interkulturellen Kommunikation. Bd. 17), Schmitt, Christoph (Hg.): *Erzählkulturen im Medienwandel*. Münster: Waxmann 2008. (Rostocker Beiträge zur Volkskunde und Kulturgeschichte. Band 3) und Hose, Susanne (Hg.): *Minderheiten und Mehrheiten in der Erzählkultur*. Bautzen: Domomiwa 2008 (Schriften des Sorbischen Instituts; 46).

54 URL <http://www.maerchen-emg.de/>

55 URL <http://www.folklore.ee/FOAFtale/>

## 6. まとめ

最後に、民話を蒐集する際の研究者の「こだわり」という観点から口承文芸研究の変遷についてまとめてみたい。

19世紀のロマン主義の時代には、政治的に抑圧された状況において古代や中世への憧れが見られ、いわゆるドイツ的なものが探求され、グリム兄弟などにより「本物の民話」が書かれた。再話の際、様々な民話を一言一句間違えない語り手が「本物」の語り手と見なされ<sup>56</sup>、語り手の素性は「農民のような素朴さ」以外さほど重要視されなかった。話し手は正確に再話できること、研究者は「本物らしく」仕上げることにこだわりを持っていた。語り手の話は、人々が持つ共通の記憶をもとに語られたものと考えられていたので、その話は語り手だけが知るオリジナルではなく、その地方の誰もが知る話として捉えられ、語り手の素性は重要視されなかった<sup>57</sup>。20世紀に入り国家主義的傾向がさらに強まってくると、学校教育にも伝説やメルヒェンが取り入れられるようになり、愛国心を育てる教材として使われた。ドイツとそうではないものを区別することにこだわりをみせ、これがアドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler) により利用されることになる。

戦後、ヒトラーに利用されたドイツ的なものにこだわりを見せる研究は、ドイツ民俗学では好まれず、その代表的な研究法とも言える神話学派的研究並びにフィンランド学派的研究が避けられ、社会学的研究法を選択するようになった。こうして自然なコンテクストの中で話され、記録された民話は信憑性が高いと考えられた。テープレコーダーが1930年代中ごろから一般化され、1940年頃から民俗学のフィールドワークにも用いられるようになったが、これを活用した研究者とそうでない研究者に分かれた<sup>58</sup>。テープレコーダー反対派からは、テープレコーダーを回

---

56 Rölleke 1986, V

57 Vgl. Brednich 2001, S. 59–60.

58 1914年にヨーン・マイアー (John Meier) によって設立されたフライブルクのドイツ民謡アーカイブには、テープレコーダーやレコードに保存された数万曲の民謡が保存されている。現在、民話蒐集にはテープレコーダーやビデオなどの記録

して「作られた状況」下で語られた話にはコンテキストが欠けていると批判された。話を録音しておいたほうが話を聞くときにメモを取る苦勞がなく、単に話の蒐集保存を目的にする場合には、この方法が適している。語り手とその語りのどこに重点を置くのかは、研究者のこだわりにかかわり、それにより録音機器使用の意味が異なる。

1950年代にパウジンガーが注目したいいわゆる「日常生活におけるハナシ」(Alltägliche Erzählung)では、ハナシに内在するドイツ的なものを探ることもなく、またハナシの信憑性を問うこともなく、純粹に現代人が興味・関心を持って話している事象が焦点になった<sup>59</sup>。これはプレートニヒが述べているように「民俗学的口承文芸研究では、ハナシの信憑性云々を明らかにすることには興味がなく、人々がどのようなハナシに興味があるかを研究の対象とする」ことが、今日の民俗学的口承文芸の基本的な考えになっていることに起因する<sup>60</sup>。それゆえに現代伝説の多方面での受容、特にどのメディアで頻繁に使われているのかなど探求することや、再話される場所や聞き手(読み手)の分析が求められる。現代伝説には、ヨーロッパやアメリカだけではなく日本にまで伝播している話がいくつもある。しかしその話の伝播ルート・速度の調査は社会学の研究領域になるため、民俗学ではその話が外国にまで伝わる背景を明らかにすることや、様々なメディアとのかかわり、どのようなコミュニケーションの場になっているのか探ることがこれからの研究課題となるであろう。Web上の話は、ある日突然削除されていたり、ホームページにアクセス不可能になったりするため、サイバースペース上の話を保存していく必要性はある。しかしそれらを闇雲に保存し資料を増やすだけで

---

装置が使われていない。これらの機器を使用することによって「自然な語り」がなくなるからと考えられているからだ。しかしヘルムート・フィッシャー(Helmut Fischer)が現代伝説を収集した際、その話をテープレコーダーで録音して再話している。Vgl. Fischer, Helmut: *Der Rattenhund. Sagen der Gegenwart*. Köln: Rheinland-Verlag 1991 (Beiträge zur rheinischen Volkskunde Bd. 6).

59 Vgl. Anm. 32.

60 Vgl. Brednich, Rolf W.: *Das Huhn mit dem Gipsbein. Neueste sagenhafte Geschichten von heute*. 111.-125. Tausend. München: Beck 1996 (Beck'sche Reihe; 1001) (erstmalig 1993), S.14-15.

はなく、どの話をどの目的でどのメディアで保存しておくのか、その基準を作ることもこれからの課題の一つになるであろう。「社会的観点からみて、ハナシを語ることは単なる娯楽手段のみならず、コミュニケーション手段である」とヘルゲ・ゲルント (Helge Gerndt) が述べているように<sup>61</sup>、今後通信技術が発達し、人々が直接会って話をしなくなる時代がもしも到来したとしても、ランケが „homo narrans“ と表現したように、人間が持つ常に何かを「語り」たいという基本的欲求により、ハナシは尽きることなく、その研究も絶えることはないであろう。

口承文芸研究が言語的また政治的境界を越えて、国際的に行なわれることをランケが常に望んでいたように<sup>62</sup>、今後より活発な研究者間の国際交流が期待される。個人的には、ドイツで始まった研究分野であるのでドイツ語が研究発表の公用語であり続けて欲しいが、研究者間交流や研究自体が促されるのであれば、英語がそれにとって変わってしまうも仕方がないであろう。その際、新たな問題 (例えば、テキスト解釈の際の翻訳のずれによって生じる問題など) が生じることが想定される。将来、この研究分野が、歴史学といった他の研究分野に取って代わられ後退の道を歩まぬよう、今後も民俗学者ならではのバリエーションに富んだ視点から、特定の事象にこだわりをもった研究がなされることが望まれる<sup>63</sup>。

---

61 Vgl. Gerndt, Helge: *Studienskript Volkskunde. Eine Handreichung für Studierende*. Münster: Waxmann 1997, S. 103.

62 同上

63 バウジンガー、ゲルント、プレートニヒなど口承文芸研究家が退官し、メルヒェン、伝説、ヴィッツ研究の大家とも言えるルッツ・レーリッヒも永眠してしまっただが、参考までに現在ドイツ語圏で民俗学的口承文芸研究講義を行なっている研究者を紹介しておく。ゲッティンゲン大学のレギーナ・ベンディックス (Regina Bendix)、イエーナ大学のザビーネ・ヴィーンカー＝ピーフォ (Sabine Wienker-Piepho) とペーゲ＝アルダー、ロストック大学のシュミット、マールブルク大学のハーム＝ペア・ツィンマーマン (Harm-Peer Zimmermann)、インスブルック大学のシュナイダーやチューリッヒ大学のイングリッド・トムコヴィアク (Ingrid Tomkowiak) などである。ドイツ語圏の民俗学研究学科の成立過程や研究動向などをまとめた著書が出版されている。Vgl. Zimmermann, Harm-Peer (Hg.): *Empirische Kulturwissenschaft, Europäische Ethnologie, Kulturanthropologie, Volkskunde. Leitfaden*

主要参考文献

- Bausinger, Hermann: Art. „Erzählforschung“. In: *EM*. Bd. 4. Berlin: de Gruyter, 1984, Sp. 342-348.
- Brednich, Rolf W.: *Methoden der Erzählforschung*. In: Göttsch, Silke/Lehmann, Albrecht (Hg.): *Methoden der Volkskunde. Position, Quellen, Arbeitsweisen der Europäischen Ethnologie*. Berlin: Reimer 2001, S. 57-77.
- Röhrich, Lutz: *Erzählforschung*. In: Brednich, Rolf W. (Hg.): *Grundriß der Volkskunde. Einführung in die Forschungsfelder der Europäischen Ethnologie. Dritte, überarbeitete und erweiterte Auflage*. Berlin: Reimer 2001, S. 515-542.
- Voigt, Vilmos: Art. „Theorien der Erzählforschung“. In: *EM*. Bd.13. 2.Lieferung. Berlin: de Gruyter 2009, Sp. 486-494.

## Betrachtungen zur volkskundlichen Erzählforschung in Deutschland

Akemi Kaneshiro-Hauptmann

Die volkskundliche Erzählforschung ist eine der Forschungsrichtungen der Erzählforschung und eines der wichtigsten Forschungsgebiete in der Volkskunde. Aber was ist „Erzählforschung“? Unter Erzählforschung versteht man die Erforschung der mündlichen Volkserzählungen, z.B. Märchen, Sagen und Schwank. Vor der Romantik hat Giambattista Vico bereits im 18. Jahrhundert darauf aufmerksam gemacht. Bis dahin wurde die Bauernkultur als Volkskultur betrachtet, aber besonders durch die Industrialisierung und den dadurch veränderte Lebensstil galt sie nicht mehr als originelle Volkskultur. In der Romantik hatten Menschen wegen der politischen Situation Sehnsucht nach der alten guten Zeit, so dass Jacob und Wilhelm Grimm die Reste der germanischen Kultur und Urformen des germanischen Glaubens und Mythen im Altertum. Daraus entstand die so genannte mythologische Schule, die erste Forschungsmethode der Erzählforschung. Die Finnische Erzählforscher Julius und Kaarle Krohn und Antti Aarne entwickelten geographisch-historische Methoden, in denen mündliche und schriftliche Märchen gesammelt und wichtige Züge des Typs untersucht wurden, um das Alter, das Herkunftsgebiet, die Ausbreitungsrichtungen zu finden. Dies war die erste vergleichende Methode der Erzählforschung. Vladimir J. Propp entwickelt dagegen die strukturalistische Methode, wobei die Märchen nach 31 Funktionen eingeteilt wurden. Parallel entwickelten sich andere Forschungsmethoden; Erzähler – und Kontextforschung, experimentelle Erzählforschung, Performanzstudien und Bewusstseinsforschung. Die letzte scheint zurzeit von besonderer Bedeutung zu sein, weil sich zeitgenössische Erzählungen und Erfahrungsgeschichten ( z.B. Geschichten aus der Kriegs – und Gefangenschaftszeit) damit untersuchen lassen.

Die Autorin beschäftigt sich nicht nur mit der Geschichte der Forschungsmethoden in der deutschen Erzählforschung, sondern auch mit der

Problematik von Mündlichkeit und Schriftlichkeit der Volkserzählungen in Bezug auf die Erzählungen der Gegenwart, neue Themen, Forschungsinstituten und Tagungen. Außerdem befasst sie sich damit, welche Aufgaben sich der volkskundlichen Erzählforschung sowohl heute als auch in der Zukunft stellen. Ziel dieses Beitrags ist, unter Berücksichtigung der historischen Hintergründe der bisherigen Erzählforschung, einen Ausblick in die Zukunft dieses Forschungsgebiets zu geben.

Menschen erzählen etwas mündlich oder schriftlich wie Kurt Ranke gesagt hat: Erzählen gehört zum menschlichen Bedürfnis. Es wird von heutigen und zukünftigen Wissenschaftlern verlangt, gezielt Erzählungen in neuen Medien zu sammeln, bevor sie verloren gehen. Trotz allem ist es wünschenswert, die Erzählforschung, die in Deutschland angefangen hat, weiter zu führen und neue Erkenntnisse zu gewinnen.